

【連載】
ヘンツェ:オペラ
【ルプパ】
ヤツガシラと息子の愛の勝利
2

ルプパ ／ 幻想と現実

岡本久美子 (大阪外国語大学准教授・古典アラブ文学) Kumiko Okamoto

ルプバを求めて主人公が旅に出る物語、と言えば、メーテルリンクの『青い鳥』を連想するひともし少なくないだろう。だが、この歌劇は、鳥をめぐる巧みな幻想世界のなかに、冷徹なほどに揺るぎない現実を描きだしている。

ハンス・ヴェルナー・ヘンツェは、中東というミステリアスな雰囲気をもたらし、世界を、物語の舞台に選んだ。かの『トゥーランドット』や『ペールギュント』などにもみられるように、ヨーロッパの作曲家たちはしばしば、異国情緒の漂う国を、言わば「非日常の異界」としてその作品の舞台にしている。ヘンツェも、日常世界とは異なる幻想世界として、中東を選んだのであろう。そしてその物語は、ふるくからアラブが語り伝えてきたモチーフを巧みにとりこみ、あたらしい文学作品の創造として結実している。

ルプパという鳥は、およそアラブ地域では知らない人はいないであろう、よく知られた鳥である。アラビア語で「ホドホド」というこの鳥は、イスラームの啓典『コーラン』にも登場する。スライマーン(ソロモン)に、シバの女王とその民のこゝろを伝える場面である。もともと、スライマーンは魔物や人や鳥の軍隊を持っており、鳥の言葉がわかるとされていた。『コーラン』では、ホドホド鳥が南アラビアのシバに飛んでゆき、そこで見たことをエルサレムにいるスライマーンのもとで詳細に語る様子が描かれている(第27章第20-28節)。また、ホドホド鳥は、スライマーンの手紙を携え、再びシバの地へ赴くのであるが、こうしたことから忠実なしもべとして語り伝えられているのである。

物語のモチーフをみてゆこう。デーモンという禍々しい言葉の響きとはうらはらに、アルカジムを助ける異類が登場する。これは『アラビアン・ナイト』などでもしばしば現れる「良い魔物」である。イスラーム教は確たる一神教であり、唯一神(アッラー)に並ぶものは絶対に認めていない。しかしながら、イスラーム以前にアラブ地域にあった精霊信仰の名残を魔物というかたちで伝承し、これらをアッラーの被造物として認めているのである。『アラビアン・ナイト』に登場するものは、その多くが「ジン」と呼ばれ、物語の主人公に敵対する者もいれば、助ける者もある。「良い魔物、良いジン」というのは、すなわち、イスラーム教徒である者のことだ。魔物に宗教があるというのは些か不思議な感があるが、イスラームに帰依している魔物は、アッラーの加護を受けるのである。この物語のデーモンも、そうしたアラブの伝承を生かし、スーパーパワーを持った援助者としてアルカジムのもとに登場させたのであろう。

また、デーモンが欲しが「命の赤いリンゴ」というのも、ペルシアの外魂伝承を想起させる設定である。外魂というのは、字の如くその物(者)の体の外にある魂のことである。この魂を奪うと、その体は死んでしまうという。リンゴを欲しが「デーモン」は、おそらくまだ不完全な存在なのであろう。かれはその体と、命のリンゴとをひとつにすることで、

その存在が完全なものになり、永遠の存在となれるのかもしれない。リンゴはデーモンの外魂なのである。リンゴは、とくにペルシアでは祭壇にかならず供される果物であった。今では世界的に知られているアダムとイブのリンゴの話であるが、じっさいの『旧約聖書』や『コーラン』の原典には、「木の実」とあるだけでリンゴとは記されていない。むしろ、気温の高いアラブ地域ではリンゴが生育することは稀である。中世、バグダードの宮廷で珍重されたリンゴは、いまのシリア北部から運び込まれたものであった。しかしながら、比較的低温地域の多いイランでは、リンゴはたくさん作られ、様々な説話に、豊穡をもたらすもの、子宝を授けるものとして語られているのである。ヘンツェがアラブ地域の伝承のみならず、異なる文化背景をもつペルシアの伝承にも通じていたことがうかがえよう。

さて、「幻想と現実」というタイトルを、拙文につけた。それは、この物語が異類との遭遇や冒険といったファンタジックな世界を展開してきた最後に、観客を現実の世界に連れ戻し、物語の次なる展開を各々の宿題として課すからである。この手法は、実はあまり知られていないようであるが、『アラビアン・ナイト』では各物語の最後に必ず用いられている手法である。およそ、私たちが思いつく昔話というのは、「めでたし、めでたし」の大団円を迎えて終結する。しかし、アラブの一大物語集である『アラビアン・ナイト』はそうではない。「・・・この上なく裕福でめでたい人生を送りましたが、やがて、すべての享楽を断ち、男女の交わりを引き離す死が訪れたのです」というように、「めでたし」の後に「死」という現実をかならず読者に突きつけている。これは、何者であれ、アッラーの定め給うた死から逃れることはできず、アッラーに並ぶ永遠を有するものなどこの世にない、というイスラームの絶対的運命観である。そこで読者は、物語の幻想の世界からこの世の現実に引き戻されるのだ。「ルプパ」の最後で、王がアルカジムとバディートの婚礼を行おうとしたとき、「めでたし、めでたし」で終わろうとしたとき、アルカジムは旅に出ることを選ぶ。このラストシーンは、観客を幻想から現実に引き戻す装置として巧みに機能している。自らを王に、あるいはバディートに、または新たな展開に旅立つアルカジムに投影し、その心情を推し量り感情移入させる見事な装置である。そして彼ら3人の明日を想像することを各々の宿題として課している。これは、お決まりの大団円を迎えるよりも、圧倒的な強さで観客の心に打ち込まれた楔となる。観客自身に続編を創らせる、あらたな文学作品として「ルプパ」は結実する。

ヘンツェはこの作品の舞台を中東にしたのは、たんに異国情緒を付したかったためではない。アラブやペルシアの伝承を精査し、描き出したいコンテに中東の伝承モチーフを融合させて物語を完成したかれの才知は、まさに驚嘆に値するものである。

第549回定期演奏会
2007年10月20日(土) 6:00p.m.
サントリーホール
ヘンツェ:
オペラ【ルプパ】
ヤツガシラと息子の愛の勝利
(舞台演出演奏会形式、全2幕、字幕付、日本初演)

指揮=飯森範親
アル・カジム=ラウリ・ヴァサー(バリトン)
バディート=森川栄子(ソプラノ)
デーモン=トム・アレン(テノール)
老人=松下雅人(バス)
アジブ=ファブリス・ディ・ファルコ(カウンター・テナー)
ガリブ=ジェローム・ヴァルニエ(バリトン)
マリク=小川明子(メゾ・ソプラノ)
ディジャブ=小野和彦(バス)
ヴォーカル・アンサンブル=東京混声合唱団
舞台演出=飯塚勲生
SY¥10,000 AY¥8,000 BY¥6,000 CY¥5,000
発売中

平成19年度文化庁芸術創造活動重点支援事業
助成: アフィニス文化財団 Affinis emblem
財団法人: ロームミュージックファンデーション
財団法人: 財団法人 花王 芸術科学財団
東京都芸術文化発信事業
社団法人: 私的録音補償金管理協会 (Sarah)